

- |                    |       |
|--------------------|-------|
| ・惜春の譜 CD-ROM について  | 編集委員会 |
| ・惜春の譜              | 永井 隆  |
| ・鱒雲の歌が出来たときの動機について | 山本 徹  |

## 惜春の譜 CD-ROM について

## 編集委員会

惜春の譜	作詞	永井隆 (1C)
	監修	鮫島盛一郎 (藤原工業大学予科 教員)
	作曲	山本徹 (1C)、富所正巳 (1 期入学 5M 卒業)、浦野周 (1E)
	採譜	小川克郎 (14E)

「鱒雲 (はたぐも)」で知られるこの歌は、1942 年の藤原工業大学予科第 1 回記念祭にあたり、1 期生が作詞作曲し、記念祭で藤原銀次郎理事長、小泉信三学長の前で初めて歌ったものである。

この歌を永く残そうと、作詞者と作曲者にご縁のある応用化学科電気化学教室、理工学部体育会山岳部、そして、この歌を部歌にしている理工学部体育会ラグビー部の各 OB 会が企画し、楽友三田会と LMC (慶應義塾マンドリンクラブ卒業生 女性パート) に演奏をお願いし、完成直後の矢上キャンパス創想館地下 2 階のマルチメディアホールで、作曲者のお一人である山本徹先輩に立ち会って頂き録音、2001 年 8 月に制作者を慶應義塾大学理工学部同窓会とし CD-ROM 版を完成させた。これを「慶應義塾大学理工学部体育会 75 年史」DVD-ROM 版に収めることにした。この時のジャケットは、「藤原工大豫科誌創刊号」の口絵に「惜春の譜」の歌詞と共にある、山本徹先輩撮影の「はた雲」である。

「惜春の譜」は、時代によって歌われ方が異なるようである。マンドリン伴奏のある CD-ROM 版では、10 期の頃の歌い方とのことである。一方、山本徹先輩が 2004 年 6 月の理工学部山岳部 OB 総会で、自ら指揮して歌っておられるのは、旧制高校の寮歌的なオリジナルスタイルである。聴き比べて頂くと興味深いであろう。

作詞者である 故 永井隆 氏 (応用化学科 1 期 : 名誉教授) と、作曲者の一人である 故 山本徹 氏 (応用化学科 1 期) のお二人が、「惜春の譜」が作られた経緯について、理工学部体育会山岳部誌「嘯雲」第 6 号 (1993 年) に記録として残して下さっている。転載して紹介する。理工学部の記録では小川克郎(14E)採譜となっているが、山本徹先輩は当初から譜にされていたと、後日うかがっている。

## 惜春の譜 永井 隆

「はたぐも」で始まる、この歌の由来は、今を去る五十余年の昔に遡る。

塾員藤原銀次郎翁の美挙によって、慶應義塾大学・理工学部の前身、藤原工業大学が創設されたのは、昭和14年(1939)のことである。僅か三学科、学生数二百人足らずで、日吉の丘にスタートした大学ではあったが、藤原理事長、小泉信三学長を中心に、新しい大学の歴史を自らの手で創り上げていこう、とする学生たちの心意気で沸き返っていた。



翌年、創立一周年を迎えた自治会<sup>+</sup>は、その記念祭歌を募集した。一回生として在学していた永井隆は、逍遙歌としてこの歌を作詩した。今にして思えば、若気の至りとしか言いようのない稚拙なものだったが、国語の教員鮫島盛一郎さんの監修を経て、これが選ばれて発表された。

当時、山岳部員だった山本徹、富所正己両君と竹道会員の浦野周君、この三人が寄り集ってこの詩に曲をつけた。作曲したと言っても譜を書いたわけではなく、三人が口ずさんだメロディーを口から口へと伝えて、歌は学生間に拡がっていった。長い間口伝だったこの曲は、十四期生の小川克郎君によって、やっと採譜され今日に残されている。

この歌はたんなる青春讃歌ではない。学園草創に向けて、いじらしいほどの青春の日々が過ぎ往くのを惜んでいる歌である。そしてまた、すでに学園にも覆いかぶさってきた戦雲に、純粋な理想を追って学生生活を貫こうとする、苦悩のつぶやきであったとも言える。

いずれにしても、この古めかしい逍遙歌を肩を組んで高唱した学友たちは、掛け替えのない仲間たちであり、この「はたぐも」の歌は、塾理工学部の輝やかなしい歴史の幕開けにふさわしい青春の歌だったのかもしれない。

<sup>+</sup>豫科會と称していた（編集委員会注）

## 緒雲の歌が出来たときの動機について

山本 徹

此のへんは、もう少し哀調を帯びよう。此の所は今少しテンポをゆるめて、逍遥風にしようと、自分で曲の音調をかもしつつ、富所君(一期入学、機械四十八卒)にバイオリンを弾いて貰い、浦野君(一期入学、電気四十四卒)に尺八を吹奏して貰いつつ、自分がハーモニカを吹いて曲をきめて行った。新丸子のウドン屋で三人は親子ドングリを食べて、九時頃まで富所の家に集って近く行われる中間試験のために、今日は物理をしようと集ったのだ。当時は学期末とか、中間考査の試験の準備には、クラスは異っても、三人か四人で集っては先生の講義を復習しては、試験にそなえたものである。



その例にもれず三人は物理の復習に集ったのである。その時あたかも来る六月十七日は藤原工大の第一回記念祭である。藤原さんと小泉学長が来て、大運動会を催し、各クラスは特別の催し物を出し、若いエネルギーでにえたぎる筈である。又その日に記念祭歌を皆で、と云っても一年と二年合せて三百人位のものであろう。

豫科会の主催で学校からも応援してもらって記念祭歌を募集した。沢山の応募者があったが、結局二年D組永井君(元慶應工学部教授、現明星大学教授)の「惜春の譜」が国語の鮫島先生を中心として選択して戴いて、入選第一位となった。先生にも校正して戴いたのが現在ある「はた雲」の歌である。

歌詞は現在の戦時態勢の中にある学生の気分を十分伝えている。あと数日に迫っている記念祭のためにもどうしても曲を作らねばならない。誰も中間試験で目をまるくしている。曲どころではない。御承知の如く藤原工大の学期末試験はそれはそれは大変なものであった。一年から二年に昇級時も沢山の落第生が出た。一学期に大不可を取ると、三学期の及第は非常にむずかしくなる。試験も大切だ。然し記念祭歌の詩があるのに曲がない。豫科会委員としてどうしても記念祭歌は成功させたい。良い詩があるのに、曲がない、専門家にはそんなにたやすくたのめない。いや吾々が作りたい。情熱こめて全て我同胞が作曲したい。

富所君の家を九時に別れて、私は東横線に乗り渋谷の大向通にある自宅についたのは十時半位であったろう。どうしても「惜春の譜」を作曲したい。もうこうなっては物理の試験はどうでもよい。腹をすえた。あらゆる高等学校の寮歌の曲を取り出す。静かに口ずさむ。青年の沈潜する心のほとぼしりや、明日にも我々同級生の中にも兵隊に行く友を思いつつ、本当に複雑な心が曲に交錯して出て来る。行進曲は勇ましくてよいが、我々の心にはぴったりしなかった。

それについて、藤原工大(慶應工学部の創立当時)は将来実利を中心として本当に役立つ人間を教育しようという藤原銀次郎先生の理想をつらぬく、固い信念により創立された。当時の金で一千万円の私財をなげうって創立した学校である。先生が常々学校に来て話し

た言葉は今も忘れない。「私は倒産しかけた王子製紙を零からもり上げ、あらゆる同業者と戦って勝ちぬいて来た。今七十才になり、総ての戦いをやめ、私には子供がいない。財産をもって死んでも仕様がな。私の総てを学校教育につぎこみ、諸君を私の孫と思い、沢山の孫のために余生を全力をもって此に答えたい。」と云う言葉は創立当時と少しも変らなかった。

先生は長野県の安母里(あもり)村の生れである。私も長野県木曾谷の全校二百五十人程の小さな中学校の卒業である。此の言葉が新聞に出たとき、私の心を魅きつけた。官立の高校試験をやめて翌年受験して第一期入学生として入ったのである。此の理想を追求するにも、入って見て未開分野が開けていた。

慶應大学は文科系統の先生が多かった。藤原工大の予科の進み方は将来エンジニアになることは分明で、あった。それ故に文科系統をやることが如何に必要か、完全なる人格の全方位的に成長するには絶対必要ということで、塾の大学の良い先生の講義を受けた。有難いことであった。

慶應大学の当時ドイツ、ゲーテ研究では彼の上に出る人のない、茅野蕭々先生に文化問題の特別講義を受けた。多くの学友が一時は理科より文科系統に心がひき込まれていった。カントの哲学、ヘッセの文学に心酔したものである。

学校の授業が終ると、クラスの連中とスポーツをして、日吉町のしると屋、おでん屋に立ち寄り色々の出来事や人生を論じ合い、次に多摩川園で東横電車を降りて、丹沢の山なみのむこうに一際高く響える富士に、真っ赤な夕陽が今沈もうとしているとき、多摩川を徘徊するのが常であった。肩を組んで放歌吟唱しては人生を語り、悩みを伝え合って家に帰るのが若者の所作であった。

今時計は十二時だ。どうしても明日までに曲を作らねばならない。時間がない。物理の試験なんぞどうでもよい。一気呵成に作ったのが此の遁遥歌「惜春の譜」である。

記念祭の目、一年生と二年生が運動場に集合して「鱮雲遠き野に佇ちて。。。」を歌った。私は旗をもって皆の前で大きく振った。胸に熱いものが湧いて来た。歌い終わって、総てのエネルギーが一時に蒸発したかの様に放心したのである。

(筆者注)

「鱮」(ひれ)意味ひれ、魚のひれ、せずじ「背- (せびれ)」。辞書を見ると「はた」という発音はない。

「旗雲」旗の様に一様にのびた秋の雲とある。

故に、本当は辞書からすると、「旗雲」が正しい様に思われます。鮫島先生が黒板で説明して下さった時は確かに「鱮」の字を書いて「はたぐも」と言われたことを思い出します。